

遠藤佐々喜覚え書き

小田 忠

序 遠藤佐々喜の論文事始め

遠藤佐々喜の論文を最初に読んだのは「川柳かねの蔓」だったように思う。手元には、コピーを四ツ目綴じにした論文が四、五点あり、川柳を材料に求めて貨幣を分析できることが解り、気持ちが出るくなつたのを想い起こす。二度目は三田史学会発行の「算盤來歴考」で、算盤を詳細に研究した論文に始めて出会った。遠藤佐々喜の材料選択眼とひとつの研究対象物から決して目をそらさない態度が新鮮に思えた。この後、遠藤の論文を調べて集めた。

遠藤の論文を読めば読むほど底知れぬ世界へと引き込まれることになる。私が特に興味をそそられた言葉は「金馬代」「銀馬代」「金極」「銀極」「錢極」である。これらの言葉と接することになったのは念願の『國史辭典』を入手し、むさぼるように、あるいは亡霊に憑依され

たかのように探查しながら読んだ。これらの言葉は江戸時代には存在し、常識であったことが現在では死語となっている。ここに江戸時代貨幣史の再現を考えていた遠藤佐々喜の存在が大きく見えた。

甲 遠藤佐々喜の身辺

遠藤佐々喜の名前は「社会経済史学」の昭和十九年一月一日発行の雑誌に掲載されたのを最後に、以後、消息不明となった。病死なのか戦災で落命されたのか、皆目分らない。「社会経済史学」の立ち上げから評議員を勤めており、戦後になって「社会経済史学」が復刊した折、告知板に日本に戻られた人、知っている人は連絡する旨の案内を出していたが、その甲斐もむなしく遠藤の名前が刻まれる事はなかった。

遠藤佐々喜の名前も珍奇だと思う。一見すると姓が二つ並んでいるような覚えやすい名前である。号を萬川と称す。諸橋の大漢和辞典を検索すると、「多くの川」「百川」と云った意味がある。遠藤佐々喜自身がどのような意味でこの号を使用したか定かではないが、知識を沢山詰め込んでいたり、研究方法および研究対象物を多く保有している意味合いではない。「多くの川」の辿る先は海であるから、たとえ小さな知識や研究であっても、最後には「海」のように大きく、系統だった貨幣史を完成させようとしていた。そのように私には見受けられる。「萬川」と云う号は、昭和三年刊行の雑誌「貨幣」に書いた「十二大黒丁銀及両面大黒小玉銀之由來」の論文が初見である。

五〇歳を少し越えて「萬川」を使用するのも洒落ているが、日常生活を送る学究としての遠藤の姿を忘れてはならない。「萬川」の号を使用した大きな理由は、貨幣が好きで、雑誌「貨幣」には銭の蒐集家や古金銀・古銭を売買する者が、当初は投稿し、自己の保有している珍品の貨幣などが掲載されていた。これらの貨幣の好事家は一応に号を持つている。遠藤自身も貨幣研究家だし、貨幣を蒐集していた点では彼らと全く同次元だし、意を決して「貨幣」の通常会員になった。東洋貨幣協会会員名簿にも遠藤佐々喜の頭に「萬川」と記入され、以後諸論文にも使用したと推察する。

遠藤佐々喜の残した業績は大きく、貨幣史・金融史・両替研究などに引用されているが、後の研究者の引用文を注意深く読むと、残念ながら 自己の見解 であるように書かれている。その行為は広辞苑の

内容を 自己の見解 として書くのに似ている。

国史や国学が盛んになり、一つのテーマを専門的に研究する研究者が少ない時代にこれだけの業績を残したのは特筆に値する。

遠藤佐々喜の仕事は雑誌「貨幣」「彗星」「日本及日本人」「史学」「社会経済史学」、『西鶴輪講三』の座談会、『貨幣の生ひ立ち』の校閲や『校注兩替年代記』などの挿絵提供、『國史辭典』および『その他』に分けられる。

雑誌「彗星」の正しい呼称は（彗星江戸生活研究）と云い、この雑誌には川柳から読みとった貨幣関係の事象を紹介している。川柳から庶民の実情や貨幣の実態を解明する方法の先駆者でもあった。大判・小判・一分銀・二朱判、丁銀・豆板銀・両替秤などを川柳から読みとっている。遠藤に刺激されたのが、これ以後「川柳」を対象にした本が出版されている。今でも、貨幣・性・女性の湯浴みなどの風俗に関係する出版物が多いのも特徴である。遠藤は純粹に研究上必要であることを認識し、その上で実行した。遠藤の考え方が一番よく出ているのは、「再吟味を要する江戸時代貨幣研究の基本問題」である。遠藤が好んだ勉強方法は 実物実証主義 と 歴史科学 なのだが、単なる実証主義では（実証があれば反証もある）ので納得できず、そこに実物を 動かぬ証拠 として研究者に披瀝した。だから、遠藤佐々喜の論文には写真や図が掲載されている。「千兩箱のいろいろ」では千兩箱を積み上げ、百兩箱・二百兩箱・三百兩箱・五百兩箱・千兩箱・二千兩箱・三千兩箱・五千兩箱・万兩箱の図版があり、万兩箱を別にして、

千両箱にこれだけの種類があるのも驚いたが、一般的に千両箱と云わ
れているのは二千両箱が多い事を突き詰めた。

「振手形實物の小研究」についても写真掲載し、『校注兩替年代記
原編』『新稿兩替年代記關鍵 資料編』『新稿兩替年代記關鍵 考
證編』などについては、固い本に少しでも柔らかいイメージを与える
為に、遠藤個人が収集した兩替道具と算法書を表紙の見返しに使用し
た。

写真や図をふんだんに使用する方法是考古学の特徴であり、考古学
の影響を受け、考古学もまた、科学的な方法を駆使しているのを知り、
歴史に援用した。遠藤の云う 歴史科学 は比較的安価な豆板銀をい
くつか購入して、刻印 重量 形態 流通年限 製造高 などを
自己点検し、種本と照合したり、別な史料とも突合して、真偽を導き
出す。

遠藤が現物を蒐集する考え方を案出したのは、三井文庫に勤務して
膨大な資料を見たことが一つの要因である。それと、元々貨幣に対し
てどうしようもない位好きであったことも注意しなければならぬ。
それは次の言葉が証明しているように思われる。

又た自分の身分相應の道楽として舊貨幣中比較的安價で今でも澤
山に得ることが出来る南鐐二朱判、一朱銀、一分銀、二分判など
の外に、丁銀や小玉銀位を少しづつ蒐集しつゝ、一方に於て私の
種本である「常是御用留便覧」の實録に照合して研究すると頗る

發明するところが多い。

このような中で遠藤は泉友会編の『造幣局』や塚本豊次郎の『本邦
通過の事歴』、同じく塚本豊次郎の『日本貨幣史』それに大蔵省編の
『改訂新版大日本貨幣史』などの写真を参考にしながら慶長丁銀が不良
であつたり、享保丁銀にも疑義を感じていた。また、小玉銀の極印の
打ち方の資料も揃い、手持ちの史料も随分整備ができたことを一人喜
んでいた。

どのような理由で遠藤佐々喜が「貨幣」に興味を持ち、貨幣研究に
邁進したのが不明である。本人は貨幣や兩替の諸道具を蒐集している
のを 道楽 と決め込んでいる。これは、この時代に生きた人の 照
れ なのか、それとも 売名行為 をさけるためか、決して本心を明
かさぬ。

乙 遠藤佐々喜の評価

昭和五年七月以降雑誌「日本及日本人」に連載された「日本永代蔵」
の輪講は一〇ヶ月を要した。昭和三六年三月二五日の発行日をもつ三
田村鳶魚編『西鶴輪講三』は青蛙房から刊行された。この本で初めて
一冊に纏められ、そこに二ページ弱の解説文を書いた柴田宵曲も輪講
参加者一八名のメンバーの一人だった。

参加メンバーは林若樹・野々村蘆舟・間民夫・山崎楽堂・沢田
章・森銃三・遠藤万川・三田村鳶魚・夏秋園子・水谷不倒・佐藤鶴

吉・柴田宵曲・真山青果・木村仙秀・赤堀又次郎・山口剛・鈴木南陵・宮武省三と豪華な顔ぶれであった。これだけ専門分野で活躍しているメンバーの内、どうして少ない解説文中、三分の一を遠藤に関する言及に割いたのか。

「永代蔵」論議に就て思ひ起すのは遠藤万川氏である。「一代男」以下の好色物には殆ど没交渉でありながら、一たびかういふ経済向のものになると、毎回熱心に出席してその蘊蓄を傾けられたのみならず、種々の参考資料を席上に齎されるのが常であった。「永代蔵」開講の一月廿六日、本文に因んで壁に掛けられた宝船の図六幅の如きは、今猶鮮かに記憶に残つてゐる。三田村翁嘗て論議当時を顧みて、「たゞ文芸を感心する方々とは、別個な仕事として西鶴検討に従事した。我等の知友先輩は殊に遠藤君を多としてこゝとを特筆する」と云はれた。同氏を偲ぶ意味に於て、こゝに附加へて置きたい。

柴田宵曲の解説によれば、西鶴の「一代男」などでは一向に論議に出席しないが、一度貨幣などの経済になると、毎回出席し、挙句の果てには参考資料も持参した。三田村鳶魚を始めとして知友先輩は論議時の遠藤万川に圧倒された衝撃が残り、特別な人のように考えられていた。

昭和七年に上梓された三井高維編『校注兩替年代記 原編』が昭和

四六年九月一日に柏書房から復刻された。三井高維は「重版に際して再序」で、やはり、忘れがたい遠藤佐々喜について熱い思いを寄せている。

憶えば前刊本書を献呈したる余が先考をはじめ、当時の三井文庫主任岡百世氏、殊には前版刊行の際一方ならぬ努力を傾注された万川遠藤佐々喜氏等既に逝きてなきは追懐の私情止み難きものがある。

ここにも、遠藤万川を敬慕していた三井高維の心情が窺える。万川遠藤佐々喜氏等既に逝きてなきの言葉は冒頭 病死なのか戦災で落命されたのか、皆自分からない。と書いたが、既に逝きてなきの一文を見ると、病死で絶命したのは確実となった。

『昭和 廢墟からの出発』の東京空襲被害状況地図には、遠藤が住んでいた品川にほとんど被害がなく、昭和二〇年五月二三日から二五日にかけて空襲があり、火災が発生しているが東京の他地域と比較すると軽微なものだった。このことから、遠藤の生存期間に空襲は受けていない可能性が高い。昭和二〇年の始めに郷里の島根県へ疎開することになった。この頃の話として、郡司勇夫が「収集」の中で「先生が東京を離れられてから、本格的な空襲がはじまった。四月の下旬だったか五月のはじめだったか、先生からはじめてお便りがあり、何の心配もなく静かにすごしている旨、小さな文字ではがき一杯に詳しく

近況を知らせて下さったが、「この葉書を読み、郡司の家が五月二十六日に空襲で罹った。それより以前の遠藤からの来信であった。それから少し後に事故により遠藤の訃報が山口利雄を通じて聞くことになった。事故は遠藤が家の近所を散策中に橋際で足を滑らし、川に転落した。実に痛ましい死であった。

丙 遠藤佐々喜の基本問題

遠藤の書いた論文は堂々としているし、惜しげもなく開陳している姿は歴史科学を標榜する遠藤佐々喜らしい。七〇有余年前に書かれた「再吟味を要する江戸時代貨幣研究の基本問題」から遠藤の基本問題を整理してみる。

1. 材料 確実な古記録、古帳簿の民間に残存するもの、俗書の蒐集（塵劫記・小説・川柳・絵本・錦絵・日記帳・旅行記・往来物・一枚刷り・毎年発行される出版物）、貨幣の実物が貨幣の本の写真版、あてにはならないが職人階級の古老の話がよい。
2. 方法の問題 通俗的（特に江戸時代の現実の再現）旧貨幣の研究の第一歩を通俗的に歩み出し、貨幣経済の實際史を概説してから各論を展開しようと考えている。
3. 歴史上の問題 紀年について、鑄造がそのまま「吹替」や「吹立」でもないし、増鑄した場合は「吹増」だし、改鑄は「吹直」の區別がある。従来の貨幣年表の通用期間や鑄造期間にも精密さが欠如している。一つの貨幣の歴史には鑄造・始行・引替・禁止の四

段階の年月研究が必要である。

貨幣の正称について。金銀貨幣の事を単に「金銀」と云い、「金銭」とも云った。金銭は一般通貨の事であった。「判金」と云えば大判に限られているのに、近世の著述には小判や歩判なども判金と称するのは習慣を無視している。銀の「二朱判」は単にそのように云うから貨制の味があり、二朱判銀と云うのは余計な事。金の二朱は「二朱金」と云い、二朱判金とは云はない。

鑄貨の職制について。大判は大判座後藤四郎兵衛累代の特権。小判・一分判は金座の特権。二朱判・一朱銀・一分銀が銀座の特権に属し、包銀も銀座包みをなす。また、銀座は鑄造銀の地金の買収やその検査をなすが、常是の家職は銀の鑄造、検印、と包封銀を取扱った

4. 経済実証の問題 三貨の関係。

大判について。進物用とは限らないし一種の通貨であったことは古い塵劫記にある。

小判と一分判について。小判と一分判のどちらが先に出来たか不明。「六十目替」の起源が未解決だし、慶長小判を一枚四匁七分六厘に制定した理由も不明。

丁銀と小玉銀について。なぜ、京阪地方に秤量貨幣が発達したか、銀目の相場の五十何匁や六十何匁という事と、丁銀一個の量目が各不定にして銀一枚に相当するものが揃っていない事や、この相場の匁と量目の匁との関係が不明。

五匁銀と二朱判。どうして五匁という単位の銀、二朱という単位の銀貨を新造する必要があったか、これは貨幣使用の実際問題。包封金銀。どうして丁銀を五百目包みにしたか、大判座包・金座包・銀座包・常是包・為替組包・本両替包などの包みの種類の問題。

単位の称呼。大判の一枚、小判および一分判の両・分・朱の唱え方、金の永・疋、銀の両・枚、銭の貫・疋などをひとまとめに解りやすく述べた貨幣史がない。

相場の事。金銀相場に町相場・触相場・書上相場の区別がある事。それと共に常に米相場が見合わせになり、その米相場に江戸と上方との相違があった事。

相場の換算について。米相場が大きく変動しても金銀相場が変動していないから、この換算法は危険である。昔の銀高を直ちに六十目替えに限って換算を試みたり、三都のいずれの相場かを極めないうで相場表をつくるのも乱暴である。

相場の書上げ方。江戸では三井組が日々の金銀相場と銭相場を本両替中と銭屋から報告を受けて、町年寄と幕府勘定所に提出するのを慣例とした。大阪では十人両替が月番でなし、幕府の公納米金に関して、諸国より定期的に町場及び市場などから書上げさせる組織があった。また、諸相場の書上げとして、米・豆・油・麦・綿などの必需品と貨幣相場との関係。

銭貨の類別について。小銭と大銭、一文銭（銅小銭と鐵小

銭）・四文銭（真鍮銭と鐵銭と文久銭）・十文銭（寛永大銭）・百文銭（天保通宝）、材質を銅・鐵・真鍮、発行所を銭座銀座及び金座支配に区別する事。

貨幣と交換物の差別。大判で売買するものは刀剣骨董品等、小判その他の金で請払いするものは江戸では人々の俸給や武家の贈答品、銀目では呉服物や菓子やお茶の類。お上から下される場合には大名・旗本などの身分には金、御家人には銀、町人百姓には銭。

金建と銀建。一般には江戸で金建て・金遣い、京・大坂は銀建て・銀遣いが通説だが、京・大坂は金銀両建てで、中国・四国・九州は銀建てである。

紙幣の本義。紙幣の本義で、金札・銀札・銭札を一般にお札と通称していたのが、藩札と総称するようになったのは『大日本貨幣史』に始まり、非常に不合理である。「八ガキ」という国語の本義は「端書」即ち「八ガキ」で端シタ金を紙片に書き添えて計算の便から起こった。「預り手形」と振出し手形とは密接な関係があるように思われる。この為、お札は少額であるのが本義で、多額面のもは後生の変則的発達のものである。

金融史上の問題 両替屋の本質。両替（御用両替・商用両替）為替（御用為替「上方御為替・江戸御為替」・商用為替「店為替・仲間為替」）貸付（御用貸付「御為替の下下為替貸付・御屋敷貸・名目貸」・商用貸付「素貸・家質貸・質物貸」）預り（御用預り・

商用預り【当座預り】・無利子【有利子】()

為替組の組合。為替十人組と江戸の勘定所御用達の十人衆との違い、為替十人組も皆金融専門の人ばかりでなく、材木屋や呉服屋を本業でやっていた。

手形の流通。為替組の使用した為替手形の「本手形」「置手形」「添手形」「預り手形」「振差紙」の各種の様式や枝手形などその他数十種にのぼっている。

6. 貨幣の実物研究 記録を中心にした実物研究法。

私は私として記録を本位としたる実物の研究法に工夫をこらしてみたい。

当時の貨幣から両替屋の実態の復元と両替屋全体をおおう金融問題に至る迄、遠藤の頭には網羅されていた。その知識の源泉は材料の選択にあった。

まず、手元にある種本とも云つべき確実な古記録である「御用留便覧」五二冊を六年間かけて精読抄録をした。その他にも昔時の実録を研究する。

古帳簿の民間に残存するもの、公共機関の諸帳簿類は云つに及ばず、各地の旧家に残る大福帳・算用帳・為替帳・手形の證書類を探索して勉強に備える。

俗書の蒐集は、その範囲が広く、(塵劫記・小説・川柳・絵本・錦絵・日記帳・旅行記・往来物・一枚刷り「米銭相場の早見」・毎年発

行される出版物「両替便覧」これらの資料を毎日毎夜、調べ続ける。

貨幣の実物が貨幣の本の写真版、写真版が出版されるまでは「金銀図録」で満足していたが、この時代では『日本貨幣史』『通貨之事歴』『新訂大日本貨幣史』『日本新舊貨幣圖』が出版されていて、極印の数・形・大きさが確認できる。

古老の談話は、あてにはならないが職人階級の古老がよい。これらの手続きを経て貨幣・金融の実感を得た。

丁 遠藤佐々喜の思想

遠藤佐々喜がいつ頃、どうして貨幣問題を中心に研究しようとしたか不明である。しかしながら、若い頃から実物を蒐集していた事を鑑みれば、東京大学の史学科に進学したのも貨幣・金融に興味を抱いていた可能性はある。

維新後、日本に変革をもたらしたのは西洋のさまざまな技術や産業システムで娯楽・服装・教育・経済・簿記・政治に至る迄変化していた。これは政府が富国強兵や産業振興を奨励した為でもある。

維新以後、啓蒙的な意味合いで庶民に大きな影響を与えたのは福沢諭吉と徳富蘇峰であった。福沢と徳富は似た面があり、福沢諭吉の『文明論之概略』、徳富蘇峰では『将来之日本』が西洋の文明に普遍的に影響を受けた知識人で、しかも日本の将来構想を意味している。遠藤達の世代は良い意味でも悪い意味でも影響を受容して、これに従う者、あるいは反発して維新前の日本を愛し、西洋の考え方では将来は

見えないと考える者がいた。

その一人が遠藤佐々喜であった。遠藤は論文の中で声高く語っている。「経済学とかその内の貨幣論などに於ても、西洋の引證ばかりでなく、もつと自國を顧みて貰ひたい。」「日本の簿記法は将来日本流に改造の余地があるやうに申されたが、時勢は段々と回顧的に来たことを吾等は力強く感ずる。」「昭和四年頃、つまり遠藤が五三才当時にはそのように感じていた。

遠藤が日本を愛していた事実は引用文でもわかることだが、どうして貨幣に興味を持ったか具体的にはわからない。しかし、東京大学史学科を卒業した遠藤にとって三井家同族会事務局に就職したことは、貨幣を勉強する機会なり影響を受けるには適した環境であった。

戊 遠藤佐々喜と三上参次と三井文庫

遠藤は明治三十九年一月に東京大学文科大学史学科に入学した。進学する前より貨幣・金融関係の事を勉強したいと考えていた。実物実証主義は突然思いついたものではなく、若い頃から現物を蒐集し、大学に入っても三上参次の学风は合理的実証的で、この傾向は明治時代より今日におよび日本史学の正統になっている。重野安縁は考證学者であり、史料の探訪整理に力を注ぎ、史学の構成に科学的態度を取って、学術的であった。だから史料の検討、史書の編述に従事している者は同じ傾向にあった。学生達にとって教授の思考・方法は実証主義を展開していたから、そこでの影響は当然受容していたと考えられる。

東京大学教授としての三上参次は多くの仕事を手がけた。代表的な仕事として宮中に関係した事。第一は御講事始における御進講、第二は皇子御浴湯の儀で読書御役、第三は聖上陛下の御進講、第四は大宮御所における御進講。大日本史料一五四冊・大日本古文書九五冊・明治天皇紀二六〇巻の編集はとても大きな仕事だった。

このような仕事は当時の日本でも注目されていた。折しも明治三六年一〇月に日本橋駿河町にあった旧三井本館にて、「三井家編纂室」が創設された。歴史になみなみならぬ関心を寄せていた三井家同族会議長八郎右衛門高棟の發議によると伝えられているが、散在している古記録・古文書類の収集と三井家の家史を編纂する目的で高棟は岡百世に、「三井家及三井家事業沿革史編纂員を命ず」の辞令交付をなし、更に高棟は編纂室顧問に委嘱した東京帝国大学教授三上参次が就任して、三井家史と事業史編纂に長く従事し、高棟の良き相談相手になった。と『三井八郎右衛門高棟傳』に書かれている。

学生時代から現物を蒐集する癖があり、当初、本人は道楽と語り、その後は実物実証の為に考えていた。三上参次教授は今と違って学生数の少ない東京大学の学生であった遠藤佐々喜の歴史に対する態度に好感を持っていた。三上参次は三井家の史料整理・修史事業に遠藤佐々喜は打って付けの人物と考えていた。

辻善之助が「故三上参次先生略歴」の中で、三上参次の世話好きを称して「人の世話をせられるにも、その世話は実に徹底して居た。これについては、予は十八歳の時より前後四十五年間先生に親炙して、

数限りない想出と感謝の念とに満ちて居るのであるが、このような条件がそろい、遠藤は明治四〇年一月に三井家同族会事務局に入社した。その時の年齢は三〇歳だった。

三上参次は三井八郎右衛門高棟の絶大な信用と家族同様の「絆」があった。「鶴操院殿林山宗竺大居士二百回遠忌法要記録」によると昭和一年九月二六日に行われた法要には二七八名の「速夜参詣者氏名」があった。そこには一般参加の遠藤佐々喜の名前を見つけることができた。同族・家族・親族の項に 三上勝 の名前が印刷されていた。この項に三上の名前が挙げられているのは三井家史編纂の相談者としての功績が大きく、同族・家族・親族と同様に扱われた。三上勝は云わずと知れた三上参次の子息である。この年以後、三上参次は体調を崩し入退院を繰り返していたが、この年は元気で当人は 油小路邸内仏供物 を見ると「押物菓子一〇、台付巻盛七〇個 三上参次」とある。彼は京都に行き、お参りしたと推察する。子息の三上勝はあくまで三上参次の代理を努めるにすぎなかった。その理由は九月二六日の法要は東京と京都と同時に行われ、重要人物ならびに縁故者は京都に集合する旨、出されていた。

己 遠藤佐々喜の仕事

先に「遠藤佐々喜の基本問題」として貨幣・金融に係る項目を披瀝したが、昭和四年当時だから遠藤が五三歳頃の問題意識であることが明白になっている。遠藤佐々喜の仕事が昭和四年以降に集中して

いるのは単なる偶然ではない。昭和四年に「再吟味を要する江戸時代貨幣研究の基本問題」を書いたのが遠藤五三歳の時だった。五〇歳以降自ら命題を付与して厳しい道を選択したのも決して道楽ではない。

昭和四年当時五三歳の年齢は引退して楽隠居を決め込むのが一般的であったのにそうしなかったのには二つの理由があった。一つは恩師の三上参次に訳があった。恩師はなくなるまで、歴史の仕事を生業の優先事項として生きたのを知っていた。

もう一つは自分も貨幣・金融問題を解決するために生きる決意が先の論文中に見いだされる。問題解決の為の発表雑誌は「貨幣」「社会経済史学」の二雑誌と富山房から刊行された『國史辭典』の諸論考が中心だった。

昭和四年当時、歴史上の問題・経済実証の問題・金融史上の問題を腑分け、問題解決にいそしんだ。多くの問題は『國史辭典』と「幕末に於ける金貨流出問題の再検討(第一回)」「幕末に於ける金貨流出問題の再検討(第二回完結)」において解決されている。

『國史辭典』の一分判と小判の項を見ると、遠藤佐々喜が問題としていた 小判と一分判について、慶長小判を一枚四匁七分六厘に制定した理由、貨幣の正称について、述べられている。詳しく例証しなくても一読すれば済む事である。

庚 遠藤佐々喜への惜別

「もう少し遠藤が生きていたら」、「あと五年生きていたら」、不明点

が解決されたのではないかと思われる節がある。残念な点は二点あって、遠藤が他界した後、故人が蒐集した古文書や現物が散逸したこと。もう一つは富山房より昭和一五年から昭和一八年にかけて出版された『國史辭典』の一―四に遠藤の諸論考があるのに、残りの五から八が未刊に終わった事である。遠藤佐々喜のことだから、きつと、後半の諸論考を完成させていたと思われる節がある。錢ざし・文久通宝・盛岡小判・蔓延金銀・文政金銀・分銅・法馬・宝永金銀・板金・正徳金銀・諸国金銀・灰吹銀・丁銀・手本金・藩札・明治紙幣・常是・民部省・札・撰銭・錠銭・和銅銭・相場銀・包金銀・調銭・ヒルモ金・政府紙幣・錢札などは、本人が研究済みで、論文として纏まっていた。上記には入っていないが貨幣・両替に関する項目として秤量貨幣や両替屋に関する事項も調査が終了していたのではないだろうか。

辛 遠藤佐々喜と『史學雜誌』

明治三五年、史學會に入会した遠藤佐々喜は若十二六歳であった。權威ある史學會に入会するには、有名な学者の紹介か口添えがあつてかなえられるものである。一体どうやって遠藤は史學會に入会したのだろうか。

明治三六年、「史學會規則」の第三條には 本會ノ會員ハ史學ニ篤志ナル者ニ限ル とあつて、特別な資格を要しない。明治五年の「史學雜誌」に、富山房からの発言として、例言 中に會員の資格について記載している。帝國大學教授博士學士其ノ他有名史家ノ論說考證解

題雜誌等ヲ選擇採收 ここには宣伝もあるのか、帝國大學教授・博士・學士・有名史家となつてゐる。

更に内容については、レフリー制を採用していることを暗に仄めかしている。遠藤佐々喜は二六歳で入会するに際して、「史學會規則」では篤志だし、例言 では有名史家であればよかつた。

ここで確認しておくのは、いづれも特別な資格を要しない。ただ、この時期遠藤が有名であつた、と云うのは疑問である。この時期に書いた論文がない。しかし遠藤ができたのよい人物であり、歴史が好きで実績があれば會員になれる。そのような可能性は具備していた。

壬 遠藤佐々喜と住所

島根県で出生した遠藤が単独で上京したか、一家で上京したかは不明である。明治三五年には満二六歳になり、史學會にも入会した遠藤の生活の場は、旧麹町区にある飯田町五ノ一の高橋方が住まいだった。明治三六年は旧本郷区の西方町一九にある新井方に移り、明治三七年には同じ本郷区だが五丁目一四の加賀屋方へ宿替えした。

毎年のように住処を替える遠藤だが、これ以後、明治三九年には小石川区表町四八、の樓館。明治四〇年は同区竹早町一〇〇、へ転宅をし、明治四三年は同区久堅町七四へ、大正三年は同区竹早町六九に、大正八年は同区音羽町八ノ一二へ、大正一三年は東京市外品川、北品川宿三ツ木九八九と続く。昭和四年には三ツ木九七三、更に昭和七年に地名改称があり、住所は東京市品川区西品川町五丁目九七三に変更

になる。遠藤は二〇余年ここで暮らした。

二六歳から四八歳迄に九回の住居をもつた遠藤は引つ越し癖があるが、品川へ転居するまでの二〇年間は東京大学を中心とした場所に引越している。もうひとつの理由は勤務先の三井同族会は日本橋の駿河町にあり、通勤に近いこともあった。これは学問の求心が東大にあり、なおかつ信望する教授が東大にいたと思われる。三上参次の居宅が駒込林町にあり、近くに住みたい心境も推し量ると小石川区は静かな環境で居心地の良い場所だった。

三井文庫が大正七年に荏原郡平塚村戸越に変わってから、翌年に小石川区音羽町八ノ一二に転宅し、ここで四丁五年過ごす、さすがに通勤が厳しいのか品川へ転居することになる。

遠藤の諸論考を読んで強く感じるのは、生活の匂いが全くしない。裏を返せば、芸術至上主義ならぬ研究至上者の遠藤の顔しか見えない。生活の匂いがしないのは結婚していないか、同居者が存在しない。もし、結婚して妻や子供が存在したとしても、独身の顔しか見えず、生活感がないとすれば貨幣・金融の勉強なり研究だけの人生を送ったのだらうか。

人生が五〇年の時代に、人生半ばの二五歳か二六歳ぐらいになると一生の仕事を発見して、方向性がはっきりするものである。そのような理屈からすると遠藤にとって一生の仕事が貨幣と貨幣史の研究であった、と云える。

癸 遠藤佐々喜著作目録

遠藤佐々喜には随分世話になった。ここで著作目録を作成して恩に報いた

- い。
- 著作目録は左記の要領で作成した。発表誌別に纏めた。頁数は一頁に満たない分量も一頁とした。雑誌の配列は論文名・掲載誌・巻号・発表誌年月日・発行所・頁数などとし、本は標題・編著・発行年・発行所の順にした。
- 1 「徳川幕府非常用の金銀分銅の研究」(『史學』第三巻第一号、大正一三年四月、三田史学会)七〇頁、大正一二年二月三〇日脱稿、口絵写真説明、表一枚、遠藤佐々喜
 - 2 「算盤來歴考」(『史學』第一〇巻第二号、昭和六年七月二日、三田史学会)二六頁、昭和六年六月二日稿、遠藤佐々喜
 - 3 「近古輸入金地金の一種「舟印子」の新研究」 徳川幕府貯蔵の印子の來歴 (『史學』第四巻第二号、昭和一〇年八月二日、三田史学会)三五頁、昭和一〇年七月二八日、遠藤佐々喜
 - 4 「算盤來歴考補遺」(『史學』第五巻第二号、昭和一一年七月一日、三田史学会)五〇頁、図版一、一、昭和一一、六、一四、写真八頁、遠藤佐々喜
 - 5 「十二大黒丁銀及両面大黒小玉銀之由來」(『貨幣』第一〇六号、昭和三年一月一日、東洋貨幣協会)三頁、遠藤萬川
 - 6 「金銀圖録警戒資料」(『貨幣』第一一一号、昭和三年六月一日、東洋貨幣協会)四頁、遠藤萬川
 - 7 「銀座數探りの大黒銀像といふものに就て」(『貨幣』第一一三号、昭和三年八月一日、東洋貨幣協会)二頁、昭和三、四、二九、萬川學人
 - 8 「手本金の研究文獻」(『貨幣』第二二五号、昭和四年八月一日、東洋貨幣協会)二頁、昭和四、六、二六、遠藤萬川
 - 9 「天から降った錢」(『貨幣』第二二八号、昭和四年一月一日、東洋貨幣協会)二頁、遠藤萬川
 - 10 「馬代献上の故實」(『貨幣』第二三〇号、昭和五年一月一日、東洋貨幣協会)三頁、遠藤萬川
 - 11 「元禄兩面大黒のイカもの」同右
 - 12 「別府出來の元禄丁銀と天保大判」同右

- 13 「川柳かねの蔓(つゞき)」、(貨幣) 第一四四号、昭和六年四月一日、東洋貨幣協会) 一頁、遠藤萬川
- 14 「萬川隨筆」、(貨幣) 第一五一号、昭和六年一〇月一日、東洋貨幣協会) 三頁、遠藤萬川
- 15 「川柳かねの蔓(つゞき)」、(貨幣) 第一五一号、昭和六年一〇月一日、東洋貨幣協会) 二頁、遠藤萬川、一三頁より続き
- 16 「創鑄二ツケル貨の大神宮奉納に就て」、(貨幣) 第一七八号、昭和九年一月一日、東洋貨幣協会) 二頁、昭和八、一、二、遠藤佐々喜
- 17 「錢相場と瓦版一ツとせぶし」、(貨幣) 第一七八号、昭和九年一月一日、東洋貨幣協会) 五頁、昭和八、一、二、遠藤萬川
- 18 「慶長金の片本兩本の極印に就て」、(貨幣) 第一八八号、昭和九年一月一日、東洋貨幣協会) 六頁、昭和九、一〇、六、追記、遠藤萬川
- 19 「明治天皇より皇太神宮へ新貨幣御奉納の事に就きて(再報)」、(貨幣) 第一九三号、昭和一〇年四月一日、東洋貨幣協会) 二頁、昭和一〇、二、二五、遠藤佐々喜
- 20 「貨幣とこうもりとんび」、(貨幣) 第一九三号、昭和一〇年四月一日、東洋貨幣協会) 二頁、遠藤萬川
- 21 「文久錢鑄造に関する金座の新史料」、(貨幣) 第二〇二号、昭和一一年一月一日、東洋貨幣協会) 六頁、昭和一〇、一、二、六、遠藤萬川
- 22 「古今米錢考の著者」、(貨幣) 第二一六号、昭和一二年三月一日、東洋貨幣協会) 一頁、遠藤萬川
- 23 「古代無文銀錢朝鮮移入私考」、(貨幣) 臨時特輯号、昭和一七年五月一日、東洋貨幣協会) 三頁、昭和一六・七・二九稿、遠藤萬川
- 24 「一貫三百(ど)でもよい考」、(貨幣) 第二四二号、昭和一四年四月一日、東洋貨幣協会) 三頁、昭和一四、三、一九、遠藤萬川
- 25 「慶長以來錢相場の公定相場略年表」、(貨幣) 第二四二号、昭和一四年四月一日、東洋貨幣協会) 三頁、昭和一四、三、一九、遠藤萬川
- 26 「慶應明治初年通用錢直 價格變遷一覽表」、錢の平價切り下げ(貨幣) 第二四二号、昭和一四年四月一日、東洋貨幣協会) 二頁、昭和一四、三、一九、遠藤萬川
- 27 「弥は賣なり」、(貨幣) 第二五六号、昭和一五年七月一日、東洋貨幣協会) 一頁、萬川生
- 28 「國家金銀錢譜續集本朝黃白志並諸國灰吹銀寄に見ゆる無文銀錢に就て」、(貨幣) 第二八一号、昭和一七年八月一日、東洋貨幣協会) 四頁、遠藤萬川
- 29 「馬蹄金の形制並我國へ輸入の影響」、(貨幣) 第二八二号、昭和一七年九月一日、東洋貨幣協会) 五頁、遠藤萬川
- 30 「正徳正字銀と謂ふものに就ての私考」、(貨幣) 第二八九号、昭和一八年四月一日、東洋貨幣協会) 七頁、昭和一八、二、二二稿、遠藤佐々喜
- 31 「神奈川懸金札の新研究」、江戸幕府金札との比較、(貨幣) 第二九〇号、昭和一八年五月一日、東洋貨幣協会) 五頁、昭和一八、二、一八稿、遠藤佐々喜
- 32 「錢幣館所藏黃金臺に就て」、(貨幣) 第二九二号、昭和一八年七月一日、東洋貨幣協会) 三頁、遠藤佐々喜
- 33 「正徳武藏判と享保新金の區別に就て」、(貨幣) 第二九三号、昭和一八年八月一日、東洋貨幣協会) 一六頁、昭和一八、七、二五稿、遠藤佐々喜
- 34 「銀人考」、(貨幣) 第二九六号、昭和一八年一月一日、東洋貨幣協会) 二頁、昭和一八、一〇、一四、神宮御衣祭當日脱稿、遠藤佐々喜
- 35 「銀人考」補足資料(貨幣) 第二九七号、昭和一八年二月一日、東洋貨幣協会) 一頁、萬川蛇足
- 36 「江戸時代現金遞送制度の再検討 金飛脚の研究」、(交通文化) 第二二号、昭和一三年四月一日、國際交通文化協会) 一三頁、口絵、遠藤佐々喜
- 37 「陸運元会社の金子入書状取扱に就て」、金飛脚研究の続稿、(交通文化) 第九号、昭和一五年一月一日、國際交通文化協会) 遠藤佐々喜
- 38 「遞送金と為替」、(交通文化) 第一一号、昭和一五年七月一〇日、國際交通文化協会) 一頁、遠藤佐々喜
- 39 「大判金の鑑賞的經濟的再吟味」、(歴史公論) 第三卷第一三三号、昭和九年二月一日、雄山閣) 三井文庫遠藤佐々喜
- 40 「西鶴輪講三」三田村高魚編、昭和三六年、青蛙房
- 41 「貨幣の生ひ立ち」造幣局編、遠藤佐々喜校閲、昭和一五年、朝日新聞社
- 42 「校注兩替年代記 原編」三井高維編、昭和七年、岩波書店

- 43 『新稿兩替年代記關鍵 資料編』三井高維編、昭和八年、岩波書店
- 44 『新稿兩替年代記關鍵 考證編』三井高維編、昭和七年、岩波書店
- 45 『校注兩替年代記 原編』三井高維編、昭和四六年、柏書房
- 46 『新稿兩替年代記關鍵 資料編』三井高維編、昭和四六年、柏書房
- 47 『新稿兩替年代記關鍵 考證編』三井高維編、昭和四六年、柏書房
- 48 『幕末幣制改革の批判と當時の金貨濫出の疑問』、『社會經濟史學』第一卷一號、昭和六年五月一四日、社會經濟史學(二四頁、昭和六、三、一五、遠藤佐々喜
- 49 『千兩箱のいろいろ』、『社會經濟史學』第二卷六號、昭和七年九月一日、社會經濟史學(四頁、口絵、遠藤萬川
- 50 『米相場の計算法の歴史に關する基礎的注意事項』、『社會經濟史學』第一卷七號、昭和七年一〇月一日、社會經濟史學(二二頁、昭和七年九月、時恰も牽勢米価の事が非常時議會の問題に上りたる際、一巳の記念として之を草す。遠藤佐々喜
- 51 『舊貨幣と新貨幣との換算法に就て』、『社會經濟史學』第三卷八號、昭和八年一二月三〇日、社會經濟史學(二八頁、昭和八、九、二〇、遠藤佐々喜
- 52 『振手形實物の小研究』、『社會經濟史學』第四卷三號、昭和九年六月一五日、社會經濟史學(五頁、遠藤佐々喜
- 53 『江戸時代の公金爲替制度に於ける御爲替組の發達真相』、『社會經濟史學』第四卷六號、昭和九年九月一五日、社會經濟史學(二〇頁、昭和九年八月下浣未定稿、遠藤佐々喜
- 54 『維新直後調査鹿兒島藩産物出入比較表に就て』、『社會經濟史學』第四卷一、二號、昭和一〇年三月一五日、社會經濟史學(五頁、口絵共、昭和一〇、二、二六、遠藤佐々喜
- 55 『徒黨告訴懸賞高札と囑託札 實物實證主義による古き高札の一考察』、『社會經濟史學』第五卷六號、昭和一〇年九月一五日、社會經濟史學(九頁、偶々労働争議の一名所たる大崎工事地帯の隣地に居る する一学窮、昭和一〇、九、五稿、遠藤佐々喜
- 56 『明治初年の銀行發生史に關する一考察』、『社會經濟史學』第六卷一〇號、昭和二年二月五日、社會經濟史學(三四頁、昭和一〇年二月二二日社會經濟史學會東京部会講演、翌年正月五日改稿、遠藤佐々喜
- 57 『江戸時代貨幣制度に於ける銀問題の研究(一)』、『丁銀の新研究』、『社會經濟史學』第九卷七號、昭和一四年一〇月一五日、社會經濟史學(二九頁、口絵共、未完、遠藤佐々喜
- 58 『江戸時代貨幣制度に於ける銀問題の研究(二・完)』、『丁銀の新研究』、『社會經濟史學』第九卷八號、昭和一四年一二月一五日、社會經濟史學(二五頁、昭和一四年九月九日、遠藤佐々喜
- 59 『川柳かねの蔓(第一回)』、『慧星江戸生活研究』第三年第二號、昭和三年一二月一五日、春陽堂(三頁、遠藤萬川
- 60 『川柳かねの蔓(第二回)』、『慧星江戸生活研究』第四年第二號、昭和四年一二月一五日、春陽堂(四頁、遠藤萬川
- 61 『川柳かねの蔓(第三回)』、『慧星江戸生活研究』第四年第四號、昭和四年四月一五日、春陽堂(五頁、遠藤萬川
- 62 『川柳かねの蔓(第四回)』、『慧星江戸生活研究』第四年第六號、昭和四年六月一五日、春陽堂(四頁、遠藤萬川
- 63 『川柳かねの蔓(第五回)』、『慧星江戸生活研究』第四年第七號、昭和四年七月一五日、春陽堂(五頁、此項終、遠藤萬川
- 64 『伊勢參宮お陰参りの真相』、『國民性を謝恩的に涵養したる民族的靈動の一發現』(其圖表解説)、『日本及日本人』一八六號、昭和四年一〇月一日、政教社(七頁、萬川遠藤佐々喜
- 65 『唐人お吉異聞』、『日本及日本人』一九七號、昭和五年三月一五日、政教社(一頁、遠藤萬川
- 66 『西鶴輪講日本永代藏 第一回』、『日本及日本人』二〇四號、昭和五年七月一日、政教社(八頁、遠藤萬川
- 67 『西鶴輪講日本永代藏 第二回』、『日本及日本人』二〇五號、昭和五年七月一日、政教社(八頁、遠藤萬川
- 68 『西鶴輪講日本永代藏 第三回』、『日本及日本人』二〇六號、昭和五年八月一日、政教社(一〇頁、遠藤萬川
- 69 『西鶴輪講日本永代藏 第四回』、『日本及日本人』二〇七號、昭和五年八月一日、政教社(一一頁、遠藤萬川
- 70 『西鶴輪講日本永代藏 第五回』、『日本及日本人』二〇八號、昭和五年九

- 月一日、政教社) 一二頁、遠藤萬川
- 71 「西鶴輪講日本永代藏、第五回」(「日本及日本人」二二〇号、昭和五年一月一日、政教社) 一一頁、遠藤萬川
- 72 「西鶴輪講日本永代藏、第六回」(「日本及日本人」二二一号、昭和五年一月一日、政教社) 五頁、遠藤萬川
- 73 「西鶴輪講日本永代藏、第七回」(「日本及日本人」二二二号、昭和五年一月一日、政教社) 一二頁、遠藤萬川
- 74 「西鶴輪講日本永代藏、第八回」(「日本及日本人」二二三号、昭和五年一月一日、政教社) 一二頁、遠藤萬川
- 75 「西鶴輪講日本永代藏、第九回」(「日本及日本人」二二三号、昭和五年一月一日、政教社) 一六頁、遠藤萬川
- 76 「西鶴輪講日本永代藏、第一〇回」(「日本及日本人」二二四号、昭和五年一月一日、政教社) 一一頁、遠藤萬川
- 77 「西鶴輪講日本永代藏、第一一回」(「日本及日本人」二二五号、昭和五年一月一日、政教社) 七頁、遠藤萬川
- 78 「西鶴輪講日本永代藏、第一二回」(「日本及日本人」二二六号、昭和五年一月一日、政教社) 七頁、遠藤萬川
- 79 「西鶴輪講日本永代藏、第一三回」(「日本及日本人」二二七号、昭和五年一月一日、政教社) 六頁、遠藤萬川
- 80 「西鶴輪講日本永代藏、第一四回」(「日本及日本人」二二八号、昭和五年一月一日、政教社) 五頁、遠藤萬川
- 81 「西鶴輪講日本永代藏、第一五回」(「日本及日本人」二二九号、昭和五年一月一日、政教社) 七頁、遠藤萬川
- 82 「西鶴輪講日本永代藏、第一六回」(「日本及日本人」二三〇号、昭和五年一月一日、政教社) 八頁、遠藤萬川
- 83 「西鶴輪講日本永代藏、第一七回」(「日本及日本人」二三一号、昭和五年三月一日、政教社) 五頁、遠藤萬川
- 84 「西鶴輪講日本永代藏、第一八回」(「日本及日本人」二三二号、昭和五年四月一日、政教社) 九頁、遠藤萬川
- 85 「西鶴輪講日本永代藏、第一九回」(「日本及日本人」二三三号、昭和五年四月一日、政教社) 九頁、遠藤萬川
- 86 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第一回」(「日本及日本人」二二五号、昭和六年五月一日、政教社) 九頁、遠藤佐々喜
- 87 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第二回」(「日本及日本人」二三六号、昭和六年六月一日、政教社) 七頁、遠藤萬川
- 88 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第三回」(「日本及日本人」二三七号、昭和六年六月一日、政教社) 六頁、遠藤萬川
- 89 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第四回」(「日本及日本人」二三八号、昭和六年七月一日、政教社) 六頁、遠藤萬川
- 90 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第五回」(「日本及日本人」二三九号、昭和六年七月一日、政教社) 六頁、遠藤萬川
- 91 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第六回」(「日本及日本人」二四〇号、昭和六年八月一日、政教社) 八頁、遠藤萬川
- 92 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第七回」(「日本及日本人」二四一号、昭和六年八月一日、政教社) 七頁、遠藤萬川
- 93 「西鶴輪講西鶴織留本朝町人鑑、第八回」(「日本及日本人」二四二号、昭和六年九月一日、政教社) 三頁、遠藤萬川
- 94 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第一回」(「日本及日本人」二三七号、昭和六年一月一日、政教社) 五頁、遠藤萬川
- 95 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第二回」(「日本及日本人」二三八号、昭和六年二月一日、政教社) 八頁、遠藤萬川
- 96 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第一四回」(「日本及日本人」二四一号、昭和七年一月一日、政教社) 七頁、遠藤萬川
- 97 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第一五回」(「日本及日本人」二四二号、昭和七年二月一日、政教社) 六頁、遠藤萬川
- 98 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第一六回」(「日本及日本人」二四四号、昭和七年三月一日、政教社) 八頁、遠藤萬川
- 99 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第一七回」(「日本及日本人」二四六号、昭和七年四月一日、政教社) 五頁、遠藤萬川
- 100 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第一八回」(「日本及日本人」二四七号、昭和七年四月一日、政教社) 五頁、遠藤萬川

- 101 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第一九回」(「日本及日本人」二四八号、昭和七年五月五日、政教社) 六頁、遠藤萬川
- 102 「西鶴輪講西鶴織留世農人心、第二〇回」(「日本及日本人」二四九号、昭和七年五月十五日、政教社) 七頁、遠藤萬川
- 103 「再吟味を要する江戸時代貨幣研究の基本問題」(「経済史研究」三二頁、昭和四年一月二〇日、攔筆、遠藤佐々喜)
- 104 「幕末に於ける金貨流出問題の再検討(第一回)」(「史學雜誌」第四二編第六号、昭和六年六月一日、富山房) 二九頁、昭和六、四、二三講演、五、二五改稿、次回完結、遠藤佐々喜
- 105 「幕末に於ける金貨流出問題の再検討(第二回完結)」(「史學雜誌」第四二編第七号、昭和六年七月一日、富山房) 四八頁、昭和六年六月一七日攔筆、遠藤佐々喜
- 106 「張紙直段に就て」(「史學雜誌」第三九編第七號、昭和三年七月一日、富山房) 一頁、文學士遠藤佐々喜君
- 107 『國史辭典』一、四富山房國史辭典編集部、昭和一五年、昭和一八年、富山房(遠藤佐々喜執筆原稿一〇一編)

【追加】

論文締切り日に提出した後、明治大学図書館に遠藤佐々喜が編集したものを二点見付けた。

「手形法慣例雜纂」資料D:190166193

「徳川幕府会計制度纂要」資料D:190166185

マイクロフィルムに収められた資料であるが現物を見ていない。但し、遠藤佐々喜の資料として紹介しておく。

【付記】

「遠藤佐々喜覚え書き」を書くにあたって、三井文庫主任研究員の賀川隆行氏より、御教示を頂き感謝申しあげます。